「親鸞と現代　第Ⅰ期」第五回

同朋大学特任教授　菱木政晴

今からお話しするのは、高木顕明さんという人についてです。高木顕明さんという人は、一八六四年生まれ、一九一四年没です。この一九一四年の四年前、一九一〇年に、天皇を暗殺することを企てたとされる大逆事件がありました。高木さんはその事件に連座して逮捕されました。そして翌年の一九一一年に死刑判決が下るんですが、即日減刑されて無期懲役となって秋田の監獄へ入れられます。その秋田の監獄で一九一四年に亡くなったんですね。

大逆事件とはどんなものかという詳しい話をする時間はほとんどないですが、要するに天皇を暗殺しようと企てたということです。二六名が逮捕されて二四人に死刑判決が下りて、そのうち一二人が翌日執行されるというすごい事件で、今日では冤罪事件であるということがほとんど定説になっています。

まず二六人逮捕された内の二四人は大逆罪ですが、大逆罪というのは死刑なんです。とにかく大逆罪であればもう死刑と決まっています。大逆、すなわち天皇に危害を加えようということですが、そのような意思を持っていた人はまず一人もいないです。それから、天皇制そのものがダメだとか、倒すべきだと考えていた人も、さほど多く

ないです。高木顕明さん自身も、「天皇を殺そう」と思っていなかったことはもちろんですが、「天皇制を倒そう」と思っていたかどうかについては、微妙です。多分そんなところまで考えていなかったと思います。

ただし、高木顕明さんの思想を押していけば、天皇制を容認する思想ではないということは言えると思います。これは法然上人や親鸞聖人と同じです。法然上人も、天皇制を倒そうとか、天皇制を否定しようということを直接おっしゃってはいないけれども、著作を読めば、そういう思想になるということは間違いないと思います。法然上人も親鸞聖人も、天皇制に否定的であることは間違いないです。

「なんとなく今日の話はやばいんじゃないか」とお思いの方もいるかもしれませんが、そんなことはありません、大丈夫です。実際、法然上人を処罰してほしいという『興福寺奏状』が出されます。『興福寺奏状』では、法然の思想が天皇制をないがしろにして、日本の神々を拝まない、そういう思想だと言っています。それはその通りですから、弾圧する方に問題があったわけです。親鸞聖人も同じ立場で、弾圧する方が悪い、我々に関しては何ら問題ないという立場を通しています。ですから、とばっちりを受けたとさえ言っていません。

それはそれとして、高木顕明さんは『余が社会主義』という一文を遺しています。これは、高木顕明さんが逮捕された際に、こういうものを書いていたという形で押収されたものです。したがって現在では、顕明さん自身が書いたものはもうないようです。今の時代なら、押収したものについて、コピーを取るとか写真を撮るとかしますが、明治の話ですから、これは押収した検事とかそういう人たちが書き写したものです。それが残っていて、見やすいように私が少し編集しました。

さて、今日のテーマである「極楽の人数」という言葉がどこに出てくるのかというと、第五章の「実務行為」というところに出てきます。これは『余が社会主義』という一文の結論部分になります。

「諸君よ願くは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱へ給ひ。今且らく戦勝を弄び万歳を叫ぶ事を止めよ。何となれば此の南無阿弥陀仏は平等に救済し給ふ声なればなり。諸君よ願くは我等と共ニ此の南無阿弥陀仏を唱へて貴族的根性を去りて平民を軽蔑する事を止めよ。何となれば此の南無阿弥陀仏は平民に同情之声なればなり。諸君願くは我等と共ニ此の南無阿弥陀仏を唱へて生存競争の念を離れ、共同生活の為に奮励せよ。何となれば此の南無阿弥陀仏を唱ふる人は極楽の人数なればなり」。

ここに「極楽の人数」という言葉が出てきます。南無阿弥陀仏を称えるのは宗教的な実践の一つですが、それは戦争賛美をやめること、あるいは平等で豊かな生活のために努力すること、そういう社会的実践と同じ意味であると述べられています。宗教的実践と社会的実践が、どうして同じになるのか。その理由として、南無阿弥陀仏の意味が平等の救済、あるいは平民に同情だからということを述べて、称える人は極楽の人数なんだと言っているわけです。

南無阿弥陀仏を称えるだけで極楽往生できるというのは、私たち真宗門徒が八〇〇年にわたって聞かされ続けてきたことです。別に不思議なことではないんですが、問題は極楽というのはどういうところか。また、南無阿弥陀仏を称えたら極楽往生するというが、その極楽往生するのは一体いつのことか。このことがハッキリしないと、これは夢物語ということになるかもしれない。顕明さんは「社会主義の書だ」と言っているけれども、極楽とか出て

くるんだから、これは夢物語の話で具体的な社会主義ではない。こんなんで逮捕されて、天皇制に歯向かうなどと判断されたら、かなわんと思うかもしれませんが、そんなことはないんです。これはかなり具体的です。決して夢物語を語っているわけではないのです。

まず、極楽はどういうところかについては、第三章「社会」に語られています。「余は極楽を社会主義の実践場であると考えている…弥陀と違はん通力を得て、仏心者大慈悲是なりと云ふ心ニ成りて、他方国土へ飛び出して、有縁々々の人を済度するに、間隙ない身となる故ニ極楽と云う」。極楽は他方国土に飛び出していって、有縁の人を済度する、そういうところだと説かれています。生前に真面目に信仰していたご褒美として、「いろいろ大変なこともあったけど、極楽に行ってゆっくり休んでね。ご冥福をお祈りします」、そういう雰囲気とはずいぶん違います。他方国土へ飛び出していってと言うんですから、極楽から他方国土と言えば、ここのことです。ここへ来るんです。だから極楽を社会主義の実践場であると言うんです。極楽の中だけではなくて、極楽から飛び出しているのも含むんです。社会主義の実践場であるというのは、ちゃんとリアリティーを持ちます。この考え方は、真宗をそれなりに学んでいる方はお分かりだろうと思います。これはいわゆる還相回向ということを述べているんです。ちょっと難しいですが、親鸞聖人に「往還二回向」という考え方がありますが、これが真宗の考え方の基本なんです。

一つ面白い話があります。配布資料に「極楽の人数はこのような苦労の褒美として極楽でゆっくり休む、冥福を受けるのではなく、他方国土、即ちこの娑婆世界で人々の救済に励むというのである」と、極楽の人数は私たちの

近くにたくさんいるのだと書いておきましたが、これはある人の受け売りです。京都に専修学院というお坊さんを養成する学校があります。同朋大学でいえば別科のような仕事をしている学校ですね。その学校の創始者と言ってもいい方に、信国淳という先生がいらっしゃるんですが、その信国先生の言葉の中にこれと似たものがあります。その受け売りです。

「法蔵菩薩は種々の身をとるというんだから、他方国土へ出かけてくるというんだから、我こそは法蔵菩薩だという人がどんどん出てきてもよいはずだ」と。すごいですね、信国先生の言葉です。「我こそは法蔵菩薩だという人がどんどん出てきてもよいはずだ、何も遠慮することはない」ということを言われている。

では次に、一体いつのことかです。極楽は他方国土へ飛び出していくこと、これはかなり社会主義の実践ということが見えてきます。ではそれは一体いつなのかということです。これはまさに結論の「南無阿弥陀仏を唱ふる人は極楽の人数なり」という言葉です。南無阿弥陀仏を称えるということと同時に起こるのです。「即の時に大乗正定聚の数に入る」、これは『教行信証』「証巻」の親鸞聖人の言葉です。「謹んで真実証を顕さば、すなわちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり、すなわちこれ必至滅度の願より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚の数に入るなり」と。この最後の「往相回向の心行を獲れば」というのと、「南無阿弥陀仏を唱ふる人は」というのは、ほとんど同じ意味です。

正定聚とは無上涅槃に入ることが決まっている人のことです。無上涅槃に入るというのは成仏する、目覚めると

いうことです。つまり、浄土にいる人というのは、今度悟ることが決まっている人だということです。「往相回向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚の数に入る」という正定聚とは、そういう意味です。つまり南無阿弥陀仏を称えた時が、極楽の住民票を登録した日です。本籍と説明してもいいけれども、本籍は戸籍と結び付いていて、親子関係と関係しているんです。極楽の住人に親子関係なんか関係ないですよ。だから住民票です。南無阿弥陀仏と称えた時が極楽の住人となる時です。そう書いてあるわけです。私は京都に住民票がありますが、名古屋の同朋大学というところで主に仕事しているわけです。京都からいえば他方国土です。これが極楽の人数の普通のスタイルです。

それで、単に「正定聚」だけでそれだけの意味になるのですが、「大乗正定聚」と「大乗」という言葉が付いています。この「大乗」という言葉が付くとどういう意味になるかというと、自分の無上涅槃を差し置いて、他方国土すなわち私たちの近くに出かけて利他教化する菩薩という意味になります。無上涅槃が決まっているということは、苦悩の解決が決まっているけれども、まだまだ解決していない人がいる。だから、その人たちを済度教化するために、自分の解決を後回しにする人のことを大乗の菩薩というんです。だから、「大乗正定聚の数に入る」とはそういう意味なんですね。したがって、「極楽の人数とは誰のことか」といえば、念仏申す私たち自身ということになります。すなわち私たち自身が、南無阿弥陀仏を称えて極楽浄土に向かう。これを往相というんですが、他方国土に出かけて利他教化、還相するのです。

では、現代の私たちはどのような大任務を果たすのでしょうか。「大任務」と言ったのは、『余が社会主義』の

「実務行為」のところに、「此の暗黒の世界に立ちて、救いの光明と、平和と幸福を伝道するは、我々の大任務を果たすのである」とあるからです。南無阿弥陀仏を称えるということは、救いの光明と平和と幸福を伝道することだから大任務だとおっしゃっているわけです。南無阿弥陀仏と声に出すというのは、宗教的実践の一つです。伝統的な言葉で言えば「行」です。行の中では、とても簡単です。意識を集中して、瞑想して、仏さんをありありと見るとか、とても深い信心を得るとかというのは、なかなか難しい。しかし声に出すというのは、誰でもできるんですよね。法然上人は、誰でもできるのが正しい実践であるとして、「正行」とおっしゃっています。高木顕明さんも親鸞聖人も、もちろん同じ立場です。

なぜ声に出す念仏が勝れているかというと、これがちょっと分かりにくいんですね。法然上人は声に出す念仏のみが「正行」であるということ、あるいは声に出す念仏こそが、仏さんが本当に願っていること、本願なのだということについて、二つの説明を立てています。声に出す念仏は、難しいか易しいかというと易しい。もう一つ、声に出す念仏は勝れているか劣っているかを比べると、勝れているとおっしゃるんです。

易しい行がどうして勝れているのか。これが最初は非常に不思議だったんです。でも今は、本当にその通りだと思っています。法然上人という人は、説明がいささかぶっきらぼうで、なぜ勝れているか、すぐにはピンとこないんです。よく読んでみると、「なるほど、ここに書いてあったか」という感じです。法然上人が、声に出す念仏をなぜ選ばれているかというと、易しいからです。難しい行を課すと、平等に救われるということが難しくなる。平等に救われるからには、易しくないとダメだと言っています。目的が平等なんですから、方法も平等でないといか

んのです。方法からすでに不平等であったら、平等という目的が達せられていないも当然です。

「勝」の説明は、結局のところ私は利他だと思います。声に出す念仏というのは、私に聞こえるだけではなくして、他の人にも聞こえるからです。南無阿弥陀仏の意味は簡単に言うと、「阿弥陀さんの差別も殺戮もない国っていいですね。その国に賛成です」という意味ですが、「賛成です」と声に出しているだけで、私が阿弥陀さんの差別もなければ殺戮もない国を伝道していることになります。これ以上の伝道はない。もし、「差別と殺戮のない国の造り方を、私が編み出した。だから黙って俺についてこい」と言ったら、その時点でもう平等が崩れますよね。俺の家来になれという話です。今の話はそうではなくて、「阿弥陀さんの願いに賛成です」「阿弥陀さんの平等と平和の希望に賛成です」と、こういう立場なので、これがもっとも勝れた行だというのは、今の説明でできると思います。

では、その力の源泉はどこにあるかということです。往相と還相の働きの源泉は、たとえ釈尊や親鸞聖人のようにすばらしい先輩諸師であっても、私たちにあるのではなく、阿弥陀如来にあるのだと言われます。これを「他力回向」と言います。

しかし往相、浄土へ往こうという相も、浄土から還ってきて人を救うという仕事も、実際は誰がやるのかといえば、私たちしかいないんです。阿弥陀如来が直接顔を出すのではない。お釈迦さんでもない、親鸞聖人でもない、法然上人でもない。私たち自身でしかないのです。そうでないと現代の人の話にならない。南無阿弥陀仏を称える人は今の話なんです。

しかし、自分が往相と還相の相を取るわけですが、とりわけ還相の方は、そんなことをした覚えはないという感じです。だって、「私も阿弥陀さんの国に賛成です」と声に出しているだけです。それは往相の相ではないでしょうか。けれども、聞いている人にとっては、利他教化になって、ちゃんと還相になっているんです。けれども、その往相と還相の源泉、力の源泉は私にあるのではない。「俺が考えたから俺についてこい」ではない。阿弥陀さんなんです。

次に行きます。なぜ他力回向でなければならないのか。それは、そもそも仏教というのは、お釈迦さんの次の二つの言葉の実現だからだと、私は考えています。その二つの言葉というのは、「自己こそ自分の主である。他人がどうして自分の主であろうか。自己をよく整えたならば、得がたき主を得る」と、「すべてのものは暴力に怯え、すべてのものは死を恐れる。己が身を引き比べて殺してはならぬ、殺させてはならぬ」です。「己が身を引き比べて殺してはならぬ、殺させてはならぬ」の部分は、簡単に言えば「殺されたくないでしょう。だったら誰も殺してはいけませんよ」ということです。これは仏教でもキリスト教でも、あるいは宗教以外の立場でも一般的な教えです。まったく普通のことです。

ところが、その次がちょっと雰囲気が違う。「殺させてはならない」、これはどういうことか。殺す人と、殺される人の話をしているのは、前の部分の「己が身を引き比べて」です。ところがここは、「殺すという仕事をさせる人」と、「殺すという仕事をさせられる人」という、社会的上下関係を前提にしているのです。この殺させるということをなくすには、その前に挙げた「自己こそ自分の主である。他人がどうして自分の主であろうか」の実現が

必要です。すなわち、他人が自分の主でないという状態があれば、殺させるということは不可能です。ここに着目して、浄土教という考え方が出来上がったんだと思います。

「自己をよく整えたならば」ということを、このまま漠然と読んでいると、ひょっとすると「自分だけは人を殺さない」という人が出てくるかもしれません。しかし、一人や二人ぐらい絶対に殺さんという人がいたところで、殺させるという社会的なことが起こった場合、そんなものはほとんど無意味ですよね。まして、「自分は絶対殺さんというところに達した」という嘘をつく奴がいたらどうなるか。「私は絶対に人を殺さない」という信念を形成して、最終解脱者と名乗ったりするとどうなりますか。その人は「自己こそ自分の主である」とは言わない。「自分が最終解脱者だ、君らはまだだ。だから俺についてこい」となります。

では浄土教が、この「自己をよく整えれば」ということをどう考えたかというと、「自己と他人との関係」で考えようとしたんです。人間関係で考えようとしたんです。「自己をよく整えたならば」というのは、自分と他者の間に、主人と家来の関係がなくなっていることだと考えたんです。つまり浄土です。浄土は平等な世界です。だから浄土という世界に往くことによって、この「殺してはならぬ、殺させてはならぬ」、あるいは「自己こそ自分の主である」を実現しようとしたのが浄土教です。

では、ここから原発の話に入りたいと思います。私は今、高木顕明さんという人を挙げて、社会主義ということを言っていますが、同時に仏法、仏教のことも言っています。仏教者や宗教者が原発のことを言うと、どんなことを言うかは大体決まっているんです。私は、浄土というのは、人間関係のことを考えている場所だと言いました。

つまり浄土は社会なんです。単なる環境ではない、社会環境です。

けれども、原発の問題を宗教者が言うと、大抵こういうことになります。これは柄谷行人さんの『世界史の構造を読む』という本の中に出てきます。「一般に流通している見方は、人間と人間の関係を捨象して、人間と自然の関係を見るものです。言い換えれば、テクノロジー、資源、環境といった問題を国家や資本と無縁であるかのように論じ、最終的に人間の欲望の批判、近代文明批判に向かうというようなものです」。つまり、原発というのは進歩と幸福を願って疑わずにいた私たちの深い無明を示すものである。私たちが自然に対して思い上がっていたんだ。これを反省せよ。天罰だというのが、だいたい宗教者の普通の言い方ということです。

「このような文明批判は、いかにも真摯で根源的な問いに見えますが、浅薄で安直で欺瞞的です。それは現代で言えば、資本主義、国家ネーションという人間と人間の関係に由来するものを不問に付すからです。あるいはそれらを自明のものと見なすからです」。もう一つ、「自然環境の問題を、単に人間と自然の関係としてのみ見ており、それが人間と人間の関係、つまり資本や国家によって根本的に否定されるものだということをみないのです。だからこの種の環境意識は、資本や国家にとって何の危険もありません。むしろ奨励すべきものです」。

原発というのは、簡単にいえば二つの政策的嘘から運営されています。一つは安全、もう一つは電力不足です。あるいは原発はコストが安いとかです。安全神話はもはや誰も信用していません。３・１１の福島事故で、原発を今でも安全と言い張る人はいません。もっとも、安全ではないということについては、本当は福島の事故が起きる前からみなが知っていました。本当に安全だったら、東京に造っているはずです。福島から東京まで、わざわざ長

い送電線を引いているわけですからね。なんでこんなことをしないといけないのか。もう最初から分かり切っていますよね、安全ではないからです。

そして、もう一つの嘘は電力不足なんですが、原発があの事故を起こしたので、「これから再開するのは大変だから、原発以外でないといかん」と思った方はたくさんいらっしゃったと思いますが、それを打ち消すかのように電力会社は意図的な停電を実施して原発なしでは電力が不足するという演出をしました。本当は電力は余っているので、計画停電とかぜんぜん必要なかったではないですか。何のためにあんなことをしたんですか。

この二つの嘘について、実は真宗大谷派は『いのちを奪う原発』というブックレットを出しております。いかにも福島の事故が起きたから、慌てて作ったみたいな感じがするでしょうが、全然違うんです。二〇〇二年に発行されています。今から九年前ということですが、反原発の運動は、どちらかというと低調だった時なんです。安全の方はさすがに信用している人はいないけれども、電力不足の嘘に完全に騙されていた時代です。

原発というのは事故が起こらなくても、どうしようもない核廃棄物を出しているわけです。この核廃棄物は事故が起ころうが起こるまいが、ずっと出続けているわけです。そして除染なんていうのは、ほとんどできるはずがないんです。閉じ込めておくしかないわけです。最終処理が不可能なんです。一万年も十万年もかかるというものもあります。ですが、原発を運転し続けている限りは、ときどきは掃除もしなければならない。ロボットにやらせたらいいと言うかもしれないが、ロボットがやっても、最後は誰かがそのロボットを触らなければならない。だから原発を運転する時は、必ず被爆労働者を必要とするんです。では、その被爆労働者はどうしてそんなことをさせら

れることになるのか。簡単に言えば社会の関係です。貧しいなど、いろんな理由があります。だから、「人と自然の関係」でなくて、「人と人の関係」で起こるのです。

原発というのは、安全でもなければ、電気が足りないわけでもないのに、なんで造るんですかね。この『いのちを奪う原発』には、そのことも書かれています。これはすばらしい本です。被爆労働者の視線でずっと語られています。この本は真宗ブックレットだけれども、一見すると真宗らしい、宗教らしい言葉は出てこない。出てこないけれども、高木顕明さんの『余が社会主義』に次ぐ、専修念仏の本だと私は思います。真宗大谷派が出したブックレットの中でも最高です。

顕明さんだったら何て言うかなということを、ずっと私は考えていました。なぜこういうことを言うのかというと、真宗では「自分の罪を自覚する」というのが中心だと言われています。往相回向、還相回向という骨格で成り立つと同時に、信仰の方は「二種深信」と言われている。自分は救われないものであると、深く自身の罪業を自覚することが真宗であると。これは間違いではないです。けれども、そこが少し誤解されています。

平和と幸福を伝道するとはどういうことか。原発を例に考えてみます。南無阿弥陀仏という言葉の意味は、「阿弥陀さんの平和と平等の国っていいですね。私もそれに賛成です」ということです。これを声に出して言うことが称名念仏、これが往相。声に出して言うと、自分にも他の人にも聞こえるから還相。この話を今までしました。その時に注目したい言葉が、「平等の救済」あるいは「平等の幸福」という言葉です。どこに出てくるかと言うと、第一部の「信仰の対象」の第一章「興味」です。「詮ずる処余ハ南無阿弥陀仏には、平等の救済や、平等の幸福や、

平和や、安慰やを意味して居ると思ふ」とあります。南無阿弥陀仏は平等の幸福と言っています。

もう一つ注目したいのは、「実務行為」のところです。「否我々は此の様な大勲位とか将軍とか華族とかと云ふ者に成りたいと云ふ望みはない。此の様な者になるとて働くのではない。唯だ余の大活力と人労働とを以て実行せんとするものは向上進歩である。共同生活である。生産の為めに労働し、得道の為めに修養するのである」。

「共同の生活の向上進歩」、この言葉にも十分注意しておきたいと思うんです。なぜかというと、先ほどの人間関係を考えないで原発を批判する立場の人は、「この原発の事故で、進歩を願ってきた我々の欲望が問題だと知らされた」と言うからです。いつ私たちが原発を望みましたか。そういうふうにさせられてしまったかもしれないけれども、させられてしまった代表から、つまり、福島県の県知事や市長、町長という人たちから、「原発はもういらん。再開も全部反対。新建設全部反対。脱原発」という声が出てこないですね。なぜ出てこないかというと、それに縛られてしまったからです。けれども、最初からそんなことを求めていましたか。誰がそんなことを求めていましたか。冗談ではないです。

そのことについて、顕明さんは次のようにおっしゃっています。第二部「信仰の内容」の第四章「思想の回転」という箇所です。「さらに第一の信仰の内容たる、その一つの思想の回転についてお話しいたします。専門家の方では、これを一念帰命とか、行者の能信とかゆうてやかましく言います」。「行者の能信」というのは、難しい言葉でいうと二種深信です。顕明さんは、実にそこを分かりやすく説明されています。「上来御咄し来りた釈尊等の人師の教示ニ依りて理想世界を欲望し、救世主たる弥陀の呼び声を聞き付て、深く我が識心感じられたら、其の時大

安心が得られ、大慶喜心が起きて、精神は頗る活発に成るのである」と。

これは法の深信が開いていることを言っていますね。機の深信と法の深信というのがあります。これも真宗の信仰というものを考える時の骨格となっているものです。だから簡単に言えば、真宗という思想は、この機法二種の深信と往還二回向で成り立っているんです。ここは信心の話を明らかにされている部分です。「大安心」「大慶喜心」というのは、法の深信の雰囲気です。

その次が問題なんです。「実に左様であろう」と。お釈迦さんの教えを聞いて大安心、大慶喜心を得たという実感を持っている人は、正直に言うとあまりいないでしょう。ところが顕明さんは「実に左様である」、当たり前やないかと言うわけです。なぜ当たり前なのかというと、そこが肝心なんです。ある一派の人物の名誉とか爵位とか勲章とかのために、一般の平民が犠牲となる国に生息している我々であるからです。あるいは、投機事業を事とする少数の人物の利害のために、東電の株主のために、一般の平民が苦しめられねばならん社会だからです。原発は安全でもなければ、電気が足らんわけでもないのに、わざわざ造るのはなぜかということの理由が、はっきり書かれています。

この部分は機の深信なんです。この部分は、救われるという自覚なんです。「平和と平等が見えてきた、確かに見えた」と。なぜ見えたかといったら、ここがとんでもないところだからです。自分は全然ダメだからなんです。機の深信は次のような言葉です。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず」と。簡単に言ってしまえば、自分は罪悪の凡夫であって、救われないという自覚なんで

す。ただし、これを言った善導さんはちょっと個人主義的すぎるのです。顕明さんの言い方は、個人主義ではなくて社会で言っているんですね。その続きをちょっと読んでみます。

「投機事業を事とする少数の人物の利害のために、一般の平民が苦しめられねばならん社会であるも…」。安全でもなければコストも高いのに、何で原発を造るんだと思いますか。それは、「考えてみたらそれしかないよ」とブックレットに書いてあります。原発を造れば、必ずプルトニウムが生まれます。プルトニウムは自然界には存在しない。ウランが核分裂するとプルトニウムができるんですが、そのプルトニウムをもう一回使ったらどうかという高速増殖炉「もんじゅ」の話はひどい嘘です。本当は原爆の材料です。それを合わせ読むと、顕明さんの文章に、我々は原発に対してどうすべきかということが、全部書いてあると思います。「実に左様である。ある一派の人物の名誉とか爵位とか勲章とかのために、一般の平民が犠牲になる国に生息している」と。

その後を読むと、戦争の話です。第五章「実務行為」の「兵士の死傷を顧ざる将軍なれば、我々の前には三文の価値もない」と。これは顕明さんが、どの時代にこのことを言っていたかということを、じっくり考えてほしいんですよ。これは日露戦争の頃なんです。司馬遼太郎さんは、日露戦争の時代を「坂の上の雲」を見ていた時代だと言います。その時は、日露戦争がそういう時代だと思っていた人がたくさんいたのですね。ところが顕明さんは、そうは言っていない。その時代を、「実に左様であろう。或一派の人物の名誉とか爵位とか勲賞とかの為に、一般の平民が犠牲となる国に棲息している我々である」。「投機事業を事とする、少数の人物の利害のために一般の平民が苦しめられねばならん社会である」。「富豪の為めには貧者は獣類視せられて居るではないか。飢に叫ぶ人もあり、

貧のために操を売る女もあり、雨に打たるゝ小児もある」。「富者や官吏は此を翫弄物視し、是を迫害し、此を苦役して、自ら快として居るではないか」。

この次が読みたかったところです。「外界の刺激が斯の如き故に、主観上の機能も相互に野心で満ち満ちて居るのである。実に濁世である、苦界である。闇夜である。悪魔の為めに人間の本性を殺戮せられて居るのである」と。つまり我々は何を考えているのかというと、平等の幸福を求めている。共同生活の向上進歩を願っているということです。何の遠慮がいるか。それが極楽の人数ということではないだろうかということです。

最後に、平和と幸福の伝道をなす主体というのは、生死罪濁の群萌の自覚を基本とする専修念仏のイメージと、そぐわないという感じがすることについて、「そうではない」ということを申し上げます。自分は罪深いものであるということと、平和と幸福の伝道をなす勇ましいものであるということは、合わないということで、還相の主体であることに躊躇することがあるかもしれません。でも躊躇する必要はないんです。ここに「生死罪濁の群萌」と書いてあるのは、意味があります。これは親鸞聖人の考えです。これは『教行信証』「証巻」に出てくる表現です。先に少し言いましたが、善導大師の機の深信は、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」で、「群萌」がないんです。一人です。我々はお互いに濁世、悪魔のために心を壊されて生きているわけです。自身だけが罪悪深重ではない。それが顕明さんには見えたのです。仏教が本当に浄土教になったのです。

自身の罪業を自覚する機の深信と、それゆえに弥陀の回向が自らに振り向けられているという法の深信は、表裏一体です。自らを生死罪濁の群萌と自覚することの出所は、本当の幸福と平和の確信のはずです。本当の幸福と平

和の確信というのは、自分の確信だったら小さい。南無阿弥陀仏と称えれば極楽へ行けると聞いて、「本当ですか」と思っているところに、大安心とか大慶喜心なんてない。本当に大安心、大慶喜心が出てくるのは、この世を濁世と見抜いたところに出てくる。この世を濁世と見抜くと、真の幸福を手にしたも一緒です。このことを曽我量深という先生は、「法の深信から機の深信が開かれ、開かれた機の深信に法の深信が摂(おさ)まる」と、非常に含蓄の深い表現をされています。この世が地獄だとわかったら、もう極楽はそこに摂まっているんだから、やたら極楽を述べる必要はないのだ。この世が地獄と分かったならば、衆生済度にいとまのない身になっているのです。

顕明さんの機の深信は、時代社会から切り離された抽象的な個の自覚ではなくて、原発を便利で幸福なものではなく、一般の平民が苦しめられるシステム、制度だと見抜く社会批判としての信心です。日露戦争の勝利を、坂の上の雲と見るのではなく、双方の人民が苦しめられる時代だと見抜く信心です。これがあるから本当の幸福、本当の平和が見えるのです。ロシアを倒して平和になったのでもなければ、中国を征服して平和になるのでもない。よくよく考えれば双方の人民が苦しめられる時代なのだと。こういうのが顕明さんの機の深信、信心です。

親鸞の思想、あるいは法然の思想は八〇〇年前の思想ですけれども、一〇〇年前に高木顕明という人によって見事に甦りました。今の時代をどう生きるかということの励ましとなる教えとして、見事に甦りました。顕明さんは残念ながら殺されてしまいましたが、そのような考え方を受け継いでいる先生方が、同朋大学にはたくさんいらっしゃいます。

どうもご静聴ありがとうございました。

（二〇一一年二月二四日）